〈青森県史〉の窓 172

幼君松平容大の斗南入り

中野渡 一耕
（県民生活文化課 県史編さんグループ総括主幹）

戊辰戦争の敗北で取りつぶされた旧会津藩主松平容保の子容大に、現在の下北及び上北の一部、三戸地方で3万石の領地が与えられたのは、1869（明治2）年11月のことである。新領地は「斗南」と名付けられた。旧会津藩士達の斗南移住は、翌年5月以降に本格化し、陸路や海路で続々と移住が続いた。

容大が最初に仮住まいした五戸町の三浦伝七家。
明治初期には明治天皇の行在所にもなった（筆者撮影）

1870（明治3）年9月、藩知事（江戸時代の藩主）の松平容大も若松（現会津若松市）から移住した。容大は前年6月に生まれたばかりで、当時1歳を過ぎたばかりの幼児であった。この容大の移住の道のりを、父松平容保の小姓を勤めた浅羽忠之助の記録「維新雑誌」（福島県立博物館蔵。『青森県史資料編』近世6にも掲載）から見てみよう。

江戸時代なら初めてのお国入りといえる重要な行事だが、容大に従うのは、権大参事（江戸時代の家老に相当）の原田五郎右衛門をはじめ、容大の生母や乳母ら30人にも満たないわずかな人数であった。

一行が若松を出たのは9月2日、新暦だと10月下旬に当たる。出発にあたっては、別れを惜しむ老若男女が見送りに出て、「皆々涙に袖を絞る様子は弁舌に尽くしがたい」ほどだった。およそ2週間の行程ののち、仮藩庁が置かれた五戸町の三浦伝七宅に着いたのは、9月22日のことだった。

出発時は、まだヨチヨチと歩いていた容大は、五戸に着くころには、押さえなくてもしっかりと歩くようになり、着物も1寸ほど短くなったようだ、と浅羽は記す。言葉を話し始めた容大は、生母のことを「ハバウ」と呼び、家来たちを「チウチウ（原田のこと）」「タタズ」「ブウ」などと呼ぶようになった。笠をさしては「チウチウ」と被りたそうなご様子、また、槍の先の星旋を「モチャモチャ」と呼んだりする姿に、一行は多いに和まされ、道中の疲れも忘れたという。

道中、駕籠の中では百人一首の本を足で踏みつけて生母に怒られ、おそるおそる母の顔を覗いて本を直したという子供らしいエピソードも示す。「日々お知恵も付いてきた」と浅羽も成長を喜んでいる。

歯が生え始め、今で言う離乳食も与えられていた、容大は特に「鶏卵のふわふわ」が好きだったという。すでに牛乳を飲む習慣があったようで、ミルクを1日に3度与えられ、手を打って喜んだという。さらに驚くのは、気付けのためであろうか、水で割った酒を与えられていた。酔った容大は目の上が赤くなり、扇子で舞の真似をしたという。

このような幼児では、とても政治を執ることは出来ず、名ばかりの藩知事だった。しかし、新しく出来たばかりの藩のシンボルとしてなくてはならない存在だった。原田は藩内の対立が原因で、斗南到着後に権大参事を解任されるが、容大は「チウチウ」と近くに呼んで、功をねぎらうため手ずから菓子や酒を与えている。「幾度か顧みしつつ幼子の声聞く毎に君かとそ思ふ」とは、このとき原田が詠んだ歌である。

容大は、1871（明治4）年2月に、新たに藩庁が置かれた田名部へ移住。幼い容大は、5月から6月にかけて下北半島に移住した藩士を激励するため、藩内の巡見を行った。しかし、7月14日に廃藩置県が断行されてスタートしたばかりの斗南藩は廃藩。容大も東京へ帰ることになる。その後の青森県に残された旧斗南藩士の苦労は周知のとおりである。

仮藩庁となったむつ市円通寺には、容大が揮毫した斗南藩士たちの招魂碑がある。建立の10年後、1910（明治43）年に容大は41歳で亡くなった。